ラスキン文庫創立40周年記念シンポジウム

ヴィクトリア朝英国のユートピア／ディストピア

アーサー・セヴァーンによるラスキン《ヴァル・ダオスタの7月の嵐雲》の模写。
水彩・ボディカラー、1884年、12.6×17.4cm.
ラスキンが1858年に描いた同名のスケッチの部分を『19世紀の嵐雲』の図版下絵用に模写。
Ruskin Foundation（Ruskin Library, Lancaster University）所蔵

開催日 2024年10月26日(土)

シンポジウム（14：00～16：30）／ 定員120名

参加費無料／要事前申込

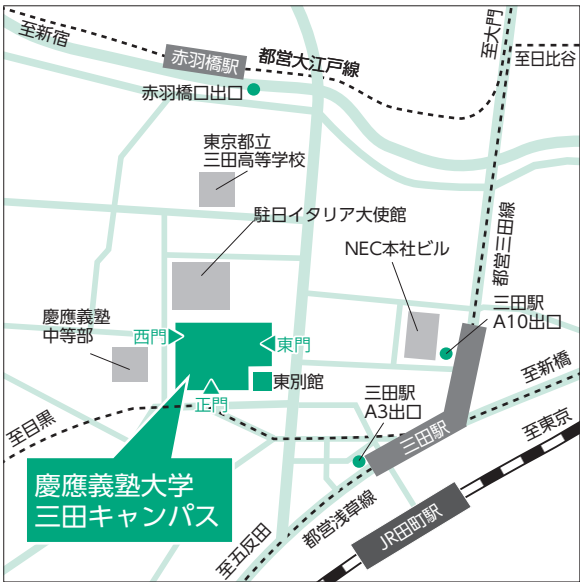
会　場

慶應義塾大学三田キャンパス
東館ホール（東館８階）
（〒108-8345　東京都港区三田 2-15-45）

申込先

締切日：2024年10月12日(土)
※ラスキン文庫ホームページよりお申込み下さい。尚、定員になり次第締め切らせていただきます。

ホームページ
https://jruskin.jp/



田町駅（JR 山手線／ JR 京浜東北線）徒歩 8 分
三田駅（都営地下鉄浅草線／都営地下鉄三田線）徒歩 7 分
赤羽橋駅（都営地下鉄大江戸線）徒歩 8 分

一般財団法人ラスキン文庫　〒104-0045　東京都中央区築地 1-8-1 亀井橋ビル 3F
TEL.03-3542-7874　毎週日・月曜日及び祝日は休館

ラスキン文庫創立40周年記念シンポジウム

「ヴィクトリア朝英国のユートピア／ディストピア」

司　会　**富士川義之**（ラスキン文庫理事、英文学）

講　師　**武藤　浩史**（英文学・文化研究）
サミュエル・バトラー『エレホン』の遊戯的想像力と長い19世紀

川端　康雄（ラスキン文庫評議員、英文学・文化研究）
リチャード・ジェフリーズ『ロンドンが滅んだあとで』のカタストロフィと「途方もない希望の波」（モリス）

横山　千晶（東京ラスキン協会会員、英文学・文化研究）
教育・環境・コミュニティ――セント・ジョージ・ギルドという「予言」

ディスカッサント

草光　俊雄（ラスキン文庫理事、イギリス社会経済史・文化史）

【趣旨】

ラスキン文庫は英国19世紀の批評家ジョン・ラスキン（1819–1900）の研究者であった御木本隆三（1893–1971）のコレクションを基礎として1984年9月に開設された図書館（アーカイヴ）です。2024年は創立から40周年の節目となります。その記念行事のひとつとして、標記のシンポジウムを開催する運びとなりました。

英国のヴィクトリア朝期（1837–1901）は一般に繁栄の時代と見られています。国内では18世紀末以来世界に先駆けて工業化を進め、中流階級が力を増し、対外的には列強のなかで競争に勝ち抜きイギリス帝国としての繁栄を見た覇権国家の時代、と大まかにいうことができますが、国内だけを見ても、「二つの国民」（ディズレイリ）と称されるような富裕層と貧困層の二極化が生じ、また工業化に伴って住宅問題や環境問題が生じるなど、さまざまな社会矛盾が顕在化した時代でもありました。後者の点について警鐘を鳴らした人物のひとりが批評家ラスキンにほかなりません。

この時代に文学面では「ユートピア」を扱った作品が多く出ています。ラスキンに強い影響を受けたウィリアム・モリスの『ユートピアだより』（1890年）はその代表作と言えるでしょう。同時に「否定的ユートピア」、現代では「ディストピア」という語で理解されているような、理想郷とは正反対のネガティヴな世界を描き出した作品もこの時代に多く出ています。サミュエル・バトラーの『エレホン』（1872年）は、美しい住民たちからなる理想郷であるかのように見せながら、主人公の旅人がそこから逃げ出さずにはいられない世界を描いている点でディストピアの先駆的作品と言えます。リチャード・ジェフリーズの『ロンドンが滅んだあとで』（1885年）は邦訳がないため日本ではあまり知られていませんが、近代都市ロンドンが滅亡したあとの世界を描いていて20世紀後半に興隆する「ポストアポカリプス」SFを先取りするようなところがあります。ラスキンについては、セント・ジョージ・ギルドという新しい農村共同体づくりの試みが特筆されます。その理念と実践は今日の状況に照らしてどのように評価することができるのでしょうか。

本シンポジウムでは、「ユートピア」「ディストピア」をキーワードとして、上記の著述家の作品を中心的に取り上げ、ラスキンが「セント・ジョージのギルド」で試みたユートピア的共同体の理念と重ね合わせて報告・討論をおこないます。

ラスキン半身像

御木本隆三の胸像

（ラスキン文庫収蔵）